

平成26年 年頭のご挨拶

会長 柘植 綾夫

明治維新、戦後復興に次ぐ第三の国創りの重大変革期にある今の日本は、その再興の要である「経済産業力」、「財政力」、「社会保障力」及び「科学技術・イノベーション力」という「国創りの4大要素」の強化課題を掲げ、アベノミクスを中核として国を挙げて取り組んでおります。その取り組みは、短期的な効果だけではなく、21世紀の日本の持続可能な発展を実現するものでなければなりません。同時に、世界の発展に向けた大きな潮流を鑑みると、日本の再興に向けて残された時間は少ないとの危機感の国民的共有も必要です。

日本再興に必須の様々なイノベーションにおいて、科学技術革新を社会経済的価値に具現化する「科学技術駆動型イノベーション」は、人材以外に資源の乏しい日本にとって極めて重要な価値創造であり、その創造能力を支える「社会のための工学、社会における工学」の実践と「人材育成・教育」は21世紀の日本の持続可能な発展の要と言えましょう。まさに、工学における「教育・研究開発・イノベーションの三位一体推進」の強化が、日本工学会の135年の歴史において今ほど求められている時は無いとの覚悟を、日本工学会を構成する会員学協会・賛助会員及びその構成員の60万人の工学者・技術者・技術経営者は新たに、それぞれの社会的立場で実践しようではありませんか。

一方では、東日本大震災と福島原発事故によって、社会からの工学者と技術者及び技術経営者への信頼は低下しており、この復元無くして科学技術駆動型イノベーションは社会からの受容を得られないとの課題認識も必要です。従来、工学は「認識科学（あるものを探求する）に立脚する設計科学（あるべきものを探求する）」と位置付け、教育・研究・社会貢献に実践してきました。しかしながら、設計科学の成果が深く社会生活と市民の心の中にまで浸透した現代においては、技術革新を社会的価値として社会が受け入れる（受容）には、工学者が主体の「設計科学」に加えて、社会が主体の「技術の社会技術化科学」も、“社会のために工学、社会における工学”の実践に必要であります。この「技術の社会技術化科学」を工学の新たなフロンティアとして提唱します。

「技術の社会技術化科学」の視座に立って、震災復興と日本再興に向けた99会員学協会と日本工学会との縦と横的機能の織りなす社会的活動は、この数年かってないほどに質と量ともに充実してきていると言えましょう。

日本工学会も引き続き会員学協会と呼応して、上記の工学の社会的使命の発揮と新たなフロンティアへの挑戦に向け、政府への提言はじめ各種のプロジェクト活動、会長懇談会と公開シンポジウム開催等を通じた社会への発信活動を、継続的に強化していきます。

更に、日本工学会は2015年11月に開催する第5回世界工学会議WECC2015 Kyoto を、会員学協会と産学官界の全面的参加を得て主催し、成功させねばなりません。今年は、プログラム企画詳細化と世界との共有化等々、

WECC2015 Kyoto の成否を決める実質的な企画準備の最終年度と言うべき極めて重要な年でもあります。

WECC2015 Kyoto の社会的、産業的意義と国策的重要性に鑑みて、幹事学会として参加いただいている会員学協会ともども、2014年中の WECC2015 Kyoto 準備完了に向けて、全会員学協会・団体と維持会員の全面的参加・貢献をお願い申し上げます。

日本工学会の会員学協会・団体と維持会員、並びにそれを構成する60万人の工学者、技術者、経営者の皆様におかれては、“社会のための工学、社会における工学”の工学スローガンのもとで、日本の再興に向けたそれぞれのお立場で社会的使命を発揮されるとともに、以前にもまして日本工学会の社会的使命の発揮に参加・貢献をしていただく様、お願い申し上げます。

平成26年1月1日